

## 湊川能楽堂略史（一）

― 設立期前後の神戸 ―

大山 範子

### はじめに

神戸には、第二次世界大戦前にも、見所（＝観客席）を備えていて定期的な演能会や流派を越えた各種の催しに利用される本格的な能舞台が存在していた。一つは、大正元年設立で昭和八年に閉鎖された湊川（大西）能楽堂、もう一つは昭和十三年に設立され昭和二十年の空襲で焼失した神戸能楽会館である。

後者は短命だったが、株式会社組織での経営や汎用性のある舞台など、さまざまな点で話題を呼んで能楽雑誌類でも取り上げられたため、一地方の能舞台としては知名度が高かった。また、設立の主導者であった能楽師（観世流シテ方）の上田隆一の幅広い活動をめぐる逸話の中で語られることも多い<sup>(1)</sup>。

ところが、湊川能楽堂については、当地で初めての本格的な能舞台であったにも係わらず（その閉鎖は神戸能楽会館の設立のきっかけともなった）、設立時期が早かったこともあって、詳しいことはよくわかっていないのが現状である。この能楽堂は、大阪在住の能楽師（観世流シテ方）大西亮太郎（後に改姓して手塚、本稿では以下亮太郎）が、門下の神田兵右衛門をはじめとする、

社中の地元の有力者たちの援助を得て建設したものである。亮太郎は後に、個人所有の舞台では日本一と云われた大阪能楽殿を建てることになるが、この時期すでに彼は、その志に向けて動き始めていた（後述）。本格的な舞台設立という夢が叶えられたのは、神戸の地においてであった。

過年、大阪歴史博物館に、亮太郎の孫である手塚稔子氏から大阪能楽殿関係資料が寄贈された。その中に、湊川能楽堂の内部全景写真三枚と平面図が含まれており、未詳だった見所の様子が明らかになった。これまで、雑誌に掲載された写真（大阪で刊行されていた写真誌『能楽写真界』や神戸の雑誌『神戸謡曲界』には複数掲載あり）では舞台側周辺しか見ることができなかったのが、貴重な資料である。その他にも、湊川能楽堂関係の書類や亮太郎の手記類などいくつか関連するものも含まれている。また、併せて手塚稔子氏所蔵の資料も拝見する機会を得た<sup>(2)</sup>。そこで、これらの関連部分と当時の雑誌記事なども併せて紹介・参照しつつ、湊川能楽堂の設立から閉鎖までの概要を記しておきたい。本稿では、まず、能楽堂設立までと設立当時の亮太郎と神戸の様相について述べる。

なお、湊川能楽堂は、設立当初は「大西能楽堂」と呼ばれていたが、亮太郎の改姓後（「手塚家改姓披露能」開催は大正十三年九月）は「湊川能楽堂」と改称されている。当地以外ではいずれも「神戸」を付した呼称が多かった。本稿では、煩雑を避けるため、以下基本的には「湊川能楽堂」と「手塚亮太郎」の表記で統一する。

一

はじめに、創立者の手塚亮太郎について。亮太郎は、慶応二年（1866）十二月十六日、大西家四代の虚雪（寸松）の娘しづ子と手塚善蔵の長男として生まれた。大西家は、京観世岩井家の門人で謡指南をしており、五代の閑雪（鑑一郎）からシテ方に転じた家柄である。手塚家へ嫁した母が大西家へ戻ったため、亮太郎は長く大西姓を名乗り、幼少から祖父寸松や伯父閑雪から芸の手ほどきを受けて育った。

幼少時の演能歴については、諸書で微妙に違いがあるが<sup>(3)</sup>、ここでは亮太郎の手記（大阪歴史博物館蔵『大正八年記事』<sup>(4)</sup>・手塚稔子氏蔵『習事勤メ扣』<sup>(5)</sup>）の年記に従って記す。四歳の時に、二十二世宗家の観世清孝の前で「難波」の小謡と「猩々」の仕舞を勤めて激賞され、直弟を許されたという。初舞台は明治三年三月十五日に「大仏供養」の頼朝（於小松原源二郎舞台）。明治十三年十月には「翁」を披き（於橋岡舞台）、明治十七年には免状を許され、大西分家として譜代職分家と同列の扱いを受ける

ようになった。明治十八年に上京して<sup>(6)</sup>、十三世観世清廉・初世梅若実・梅若六郎（後の観世清之）に師事。明治二十三年に帰阪後は、曾根崎に稽古舞台を作って定期能を始め、明治三十一年には神戸観世会、翌年には大阪観世会を組織するなど、関西地区における能楽の発展にも尽力した。亮太郎は多数の門弟を育てたが、門下に有力財界人も多いことで知られており<sup>(7)</sup>、彼らの後援を得て大正元年に神戸湊川能楽堂を、続いて大阪能楽殿を建てた。

亮太郎のその後については概略のみ記しておく。

大正十三年、門下の加藤貞三を養子に迎える際に、亮太郎は本姓の手塚<sup>(8)</sup>に改姓する。家元からはこれまで通り職分家として認められており、活動は従来通り続けていた<sup>(9)</sup>。同年始めに妻を失った亮太郎は、体力的に衰えを感じていたようで、翌年、大正十二年十月に設立されたばかりの阪神能楽組合長の職も健康上の理由で辞そうとしている。体調が芳しくない旨の報道もされていたが、昭和三年には、宗家の観世元滋から大正十五年十一月に特別に許された「関寺小町」の上演を実現させた。そして、持病の悪化により昭和六年十一月十三日逝去、享年六十六歳、法名「観寿院音誓公雪居士」。この後、手塚門は大きく変動することになる。

亮太郎は、神戸には早くから稽古場を持ち、後年「元町老」と呼ばれた福崎仁を筆頭として、職分・素人ともに多くの門下を育成してきた。当時の神戸の能界の様子をみよう。

明治二十九年頃日清戦役の影響を受けて謡曲趣味を研究する者が多く成った時に大阪から故大西閑雪同亮太郎の父子が轡を列べて来神し神田派（\*引用者注、前の部分に「神田兵右衛門と云ふ斯界の古老」が当時既に一家を成していたと記す）に身を寄せた。そもこれが大西亮太郎の扇港に名を現す最初

なのである、亮太郎は一剣北斗を揺がすの気概を以て当時觀世の大集団玉永会を亡ぼし昇天旭日の勢を見せて遂に天下を掌握した、郡保太郎、上田周太郎、福崎仁、神田慶太郎等は能く大西派を助けてその帷幕に参興した英傑である俗に大西派四天王と云ふは此の四名である、郡は不幸にして大正五年の秋冥府の人となつた行年四十七、大正二年（\*ママ）二月大西派は湊川遊園地に能舞台の建設を企て工事一万四百六十円八十二錢を投じて総坪数百九十七坪八合五勺の能楽堂を建て、同派はこれを金城蕩地として斯界を風靡し湊川の老松が颯々と音立つる目出度い時代を迎へたのであつた、（\*傍線は引用者）<sup>(10)</sup>

本書は、「趣味と名士編輯部編纂」というように、紳士録の趣を呈した書物で、玄人・素人を問わず「謡曲家」をあげて紹介している。「神田派」たる兵庫津の名主家「神田兵右衛門」が、神戸における大西亮太郎の有力な後援者であつた。また、ここに大西派四天王として名をあげられた人物は、いずれも亮太郎門下の職分で（神田慶太郎は、兵右衛門の嫡男だが、能楽師の道を選んだ）、後掲の能楽堂披露能にも出演している。

湊川能楽堂については、具体的に「建設を企て」着手したのは、

実際には明治四十五年二月であつた。能楽堂設立に先立つ明治期の状況を確認しておこう。

## 二

先述のごとく、大正期以前、神戸には本格的な能楽堂は存在しなかつた。比較的大きいものとしてまずあげられるのは和田宮神社の能舞台で、これは明治三十四〜五年の神社移築の際に新築されている<sup>(11)</sup>。神社の新築にあつては、和田岬砲台竣工に尽力した、先述の神田兵右衛門が関わつた。この舞台は見所はないものの、明治三十四年五月二十四日「舞台披奉納能」をはじめとして、明治三十八年四月十六日「観阿弥五百年祭追善能」、明治四十年七月十四日「神戸観世会別会」と大規模な能会が三回開催されている。これらは云うまでもなく神田の謡の師である亮太郎が関与しての催しで、舞台披奉納能では、亮太郎自らが「道成寺」を舞つている<sup>(12)</sup>。

また、神田兵右衛門は、能の「神戸に於ける復興宣伝の為」毎年正月四日「御面掛」の古式を主要な神社に奉納していた人物としても知られている。これは、「四日、早朝から大西閑雪、大西亮太郎、改正龍造等の弟子達も兵庫出在家町の神田邸に集まり、粥のような軽い朝食の後、和田神社を振出しに七宮神社、長田神社、湊川神社、生田神社の五社を廻つて奉納。」といったもので、和田神社移築の翌年明治三十四年正月から始まり、神田慶太郎の没する昭和十年まで続いたという<sup>(13)</sup>。亮太郎は、叔父の大西閑

雪とともにこの行事に当初から参加して長きにわたって勤めており、それが亮太郎の神戸における活躍を広げるきっかけともなった<sup>(14)</sup>。

明治三十八年四月十六日には、「観阿弥五百年祭記念式能」が盛大に行われた。全国では大阪（博物館能舞台）で一日、東京（観世舞台）で二日と、三ヶ所だけで催されたものだが、関西でその主導者となったのは、家元や東京の能楽師たちとも親密な関係にある亮太郎だった。もちろん、そうした大きな催しを受け容れるだけの経済的余裕と素地が神戸にはあったということでもある。明治の終りから大正期にかけては、亮太郎のほか、岡崎益太良や伊東隆三郎、藤井美蔭といった、後に神戸の能楽界の担い手となった能楽師たちが東京や京都から次々と来神した。この時期の神戸は、第一次世界大戦の好況を背景とした、能楽興隆期ともいえるべき時代であり、こうした中で湊川能楽堂は誕生したのである。

### 三

湊川能楽堂について、亮太郎は前掲の『大正八年記事』に次のように記している。

一 神戸湊川の舞台ハ神戸稽古場ハ宿屋に寺に貸家にいろくの辛抱をなして後、武岡豊太殿の骨折にて湊川の上にて明治四拾五年二月ヨリかゝりて大正元年十一月に舞台披せるもの也。当地有志いろくあれ共、くわしくハ其時の記録の帳にしるす。神戸兵右衛門、村野山人殿等発起人也。

「記録の帳」は現存しないが、神戸兵右衛門・武岡豊太・村野山人という有力者たちが後援をした点は確認できる。また、恒例の行事を記した条には「神戸舞台」について「一 大正元年十一月十八日ハ神戸舞台披ノ日 記念日」と記し、また年末年始の行事の条には「一 十二月三十日 大阪へ弟子集ル事ノ一 同 三十一日 神戸舞台へ集ル事」とも記す。大阪能楽殿のように複数の「記念日」はないものの、亮太郎の幅広い能楽活動において神戸の舞台もまたそれなりに機能していた。

ちなみに、『大正八年記事』には「能楽殿設立発起回章」と題する草稿の写しも記されており、大阪能楽殿建設の構想が早くから計画されていたことがわかる。この草稿は、明治四十四年九月二十日付けで、住友関係者（註8参照）を含めた後援者十五名に宛てられたもので、住友から堂ヶ島の土地の提供を受けたことを述べ、念願の能舞台設立に向けて相談の集まりを持ちたい旨が記されている。神戸の舞台建設の事情は未詳ながら、大阪の場合とさほど変わらないだろうことは想像に難くない。

明治四十五年二月に建築に着手した能楽堂は、神戸市湊川上ル荒田町四丁目に同年（大正元年）十月に落成、翌月十六日から六日間にわたって落成披露能を開催した。この時の様子は、大正元年十一月十六日付「大阪毎日新聞」に以下のようにみえる。

大西新舞台の「翁十二月往来」

神戸市湊川に建築中なりし観世流能楽家大西亮太郎氏の能

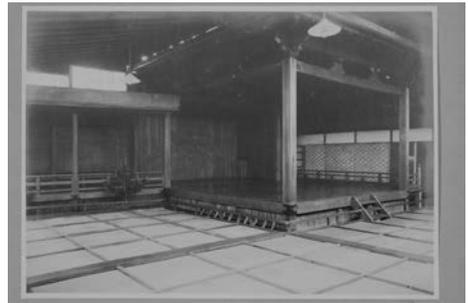
舞台は漸く工を竣へ、十六日より引続き六日間、その披露能楽を催ほすこととなれり。場所は湊川遊園地の北端、松籟笛鼓和する所。舞台、橋掛り、鏡の間、楽屋等すべて古式に則りて建築し、見所は約七百人を容るゝ広さあり、特に採光の設備行届きて、内舞台の短所たる薄暗く陰気な点更になく、頗る晴れやかなる舞台なり。

内部の様子は、前述の見所も写った内部全景写真（後掲）と平面図から、ある程度想像することができる。平面図によると正面奥に「上席」が設けられていたようだが、残念ながらそれは写っていない。前掲記事には「見所は約七百人を容るゝ広さあり」とあるが、そこまで広がったかは存疑である。この平面図は間取りや設えを指示するためのものらしく、計測上は不明確だが、ただ、十八間（約三二・七二メートル）×二十五間（約四五・四五メートル）という寸法に従うならば、総坪数約四四九坪という結構な広さになる。（ちなみに、大阪能楽殿は、総坪数七三七坪五合、一階の建坪総計三四五坪。）二階があることはわかるがその様子は記されていない。舞台周りや住居部分など、規模は違えどその様子は大阪能楽殿を彷彿させる。

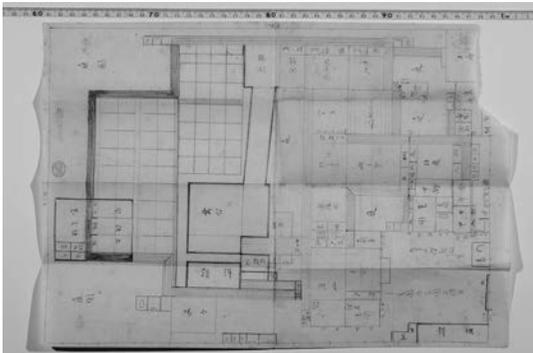
亮太郎は、神戸の稽古時などはここに居住していたらしい。大阪能楽殿ができるまでは、神戸の住所入りの氏名印（神戸市湊川上ル荒田町四丁目／大西亮太郎／電話本局四二二六番）<sup>15</sup>、大阪の住居の所番地（大阪市南区塩町三丁目／電話南一六一九番）と神戸の舞台住所（神戸市湊川遊園地上ル／電話四二二六番）を



神戸湊川能楽堂写真03（大阪歴史博物館蔵）



神戸湊川能楽堂写真01（大阪歴史博物館蔵）



神戸湊川能楽堂図面（大阪歴史博物館蔵）



神戸湊川能楽堂写真02（大阪歴史博物館蔵）

並べて印刷した封筒なども使用しており、一種の私宅扱いであった。ただ、実際にはそこに住んで留守番をしていたのは、神戸の門人木下一三（高諷会）主宰）であった<sup>16)</sup>。

さて、十一月の竣工後、同月十六日から六日間にわたって披露能が催された。初日は観世家元の「翁」、二日目は大西閑雪・亮太郎が左右尉をつとめる「翁」十二月往来ほか、関西の主だった演者たちが集って大曲が次々に演じられ、三日目からは社中の有力者たちの演じる素人能、六日目は素謡会という構成で、「兵神間の実業家連を中心に大阪よりも素人の天狗家数氏加勢して」行われ、「其中には神田松雲翁、武岡豊太氏等の剛の者あり、恰も素人能楽家の一大競技会といふべく、関西地方では一寸例の無き大催し」（前掲「大阪毎日新聞」）であった。

番組は以下の通りで、職分・素人入り交じった華やかな会であった。（『神戸謡曲界』四十二号「あ、湊川能楽堂——落成披露當時を回顧——」参照・『能楽』第十卷十二号）。

湊川能楽堂落成披露能番組（大正元年十一月十六日～二十一日）

初日

「翁」観世清久、千歳・大西亮太郎、面箱・茂山良一、三番叟・茂山忠三郎 「高砂」大江又三郎、田村弥三 「田村」郡保太郎、江崎菊治 「熊野 村雨伝」片山九郎三郎、中村信一 「道成寺」大西亮太郎、中村弥三郎、間・茂山良一 「融」生一庸、栄保助 「金札」大西信久、栄武松

狂言：「三本柱」茂山久治 「釣狐」茂山千五郎 「川上座頭」野村又三郎 「鎌腹」茂山千五郎

二日目

「翁 十二月往来」大西閑雪、大西亮太郎、千歳・福崎仁、面箱・中垣利幸、三番叟・茂山千五郎 「加茂」伊東種三郎、江崎菊治、間・御田林甲子郎 「八島 弓流・素働」観世清久、栄保助、間（那須）・茂山久治 「大原御幸」大西亮太郎、法王・大西閑雪、中村信一 囃子「百万」上田周太郎 一調「鳥追舟」笠井観水、青柳茂 一調「杜若」井上勝太郎、前川光隆 「三輪」生一庸、田村弥三 「安宅 勸進帳・瀧流」片山九郎三郎、中村弥三郎 間・野村又三郎 「乱 双之舞」大西新三郎、神田慶太郎、江崎菊治

狂言：「松櫟」茂山良一 「花子」茂山忠三郎 「居杭」茂山忠三郎 「大般若」河村健三郎、河村保之助

三日目（素人能）

番囃子「神歌」萬俣兵太郎 番囃子「蟻通」武岡豊太、生島四郎八 「芦刈」石川英一 「羽衣」梶原右一郎 囃子「忠度」川越英一 囃子「松虫」吉岡如水 素謡「千手」大谷伊織 「鉢木」荒田角藏 「舟弁慶」小島甚三郎  
狂言：「煎物」栗荷政一 「蝸牛」松尾塵外 「武悪」鈴木猿男 「柑子」佐久間可笑 「千切木」隅城左門

四日目(素人能)

「合甫」末正義太郎 「敦盛」木俣參輔 素謡「砧」沢田亀之助、石川英一、吉岡如水 素謡「盛久」金澤楠蔭 囃子「班女」飯田五市郎 囃子「放下僧」竹田孝 囃子「山姥」櫻部清 囃子「富士太鼓」榎井如萍 仕舞「殺生石」池田政雄 一調「善知鳥」井上真次 「弱法師」神田松雲 「鞍馬天狗」白木孫一郎

狂言：「二人袴」汐見良太 「石神」尾関暁雨 「無布施経」松本京一 「千鳥」繁田弁之助 「宗八」志波楽蔵

五日目(素人能)

「小督」梁田栄三 「蟬丸」山下祐三郎 素謡「通小町」中島保之助、前田奈良三郎、吉川久七、素謡「藤戸」神田保三、宗国金平 囃子「吉野天人」三宅節三 囃子「熊坂」直木為山 「大仏供養」大浦松月 「紅葉狩 鬼揃」大西亮太郎 狂言：「粟田口」保田一久 「膏藥練」小泉兵衛 「口真似」西八木一郎、西八木政二 「清水」村上茂太郎 「三人片輪」末吉泰次郎 「福之神」茂山忠三郎

六日目(素謡会) (\*の人名は異同あり、「大観世」に依る)

素謡：「雨月」上山與作、松谷常七\* 「巴」山路長左衛門、山口常吉 「野宮」中居豊三郎、中村甚之助 「天鼓」谷富之助、北野藤兵衛 「松風」西本作次郎、村山利三郎\* 「巻絹」丸山月男、高辻熊内\* 「葵上」曾根誠明、百崎俊雄\* 「国栖」沢野卷水、前田徳左衛門

\*初日の観世清久は後の二十四世観世左近元滋、片山九郎三郎は後の観世元義、生一庸は後の生一左兵衛。二日目の伊東種三郎は後の伊東隆三郎(神戸在住の職分)、井上勝太郎は、後の八世井上嘉介。四日目に「弱法師」を演じている神田松雲が神田兵右衛門。

前掲新聞記事は亮太郎のコメントと大阪能楽殿の話題で締めくくられている。

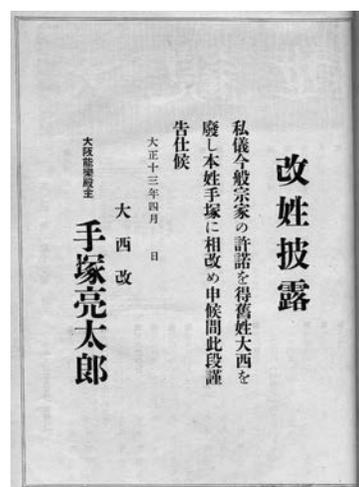
右につき大西氏は曰く。「今回の披露能には家元でも非常に祝つてくれました、初日の翁の装束には観世家の重宝たる家康公より拝領の鎧下蜀江か家光公より拝領の銀蘭の狩衣のうち何れかを着用することとなり、私共も二日目の翁には秘蔵の弘法大師作と赤鶴作の尉面を用ふることと致しました。十二月往来は三十年前大阪橋岡の舞台であつた以来の珍しい物であります。新舞台は神戸社中の手で造られましたので、之を見た大阪の社中は躍起の有様ですから、やがて大阪にも近い中に新舞台が建ちます」と喜びぬるが、大阪は住吉家が桃谷方面にて地面を寄付し、社中より約二万円を換金して、更に大規模の大西舞台を建築する計画なりと。

#### 四

神戸で随一の本格的な能楽堂であった湊川能楽堂では、創設以来、各種の能会が開催された。その賑わいぶりは各種の能楽雑誌に掲載された演能予告・記録や地元誌『神戸謡曲界』の記事にも見え、この能楽堂が神戸の能楽興隆に果たした役割は大きいことが窺える。亮太郎は、神戸ではここを本拠地として定期能（原則として毎月第四日曜日）を催すなど、神戸の能謡界に多大な貢献をした。新進の気鋭に富んでいた亮太郎は、流派の異なる競演などさまざまな新しい試みをしているが、その舞台となつたのは多くの場合、まず神戸だった。大阪や京都では時期尚早でできないことであつても、街の規模はさほど大きくはなく、新しいものを受け容れる柔軟性に富む神戸ならば可能だったのであろうか。

大正期の利用状況と能楽堂のその後については次号で詳説するが、設備に関しては、設立十二年後に見所の増築をしている<sup>(17)</sup>。また、大正十三年十一月には木下一三主宰の「高調会」が、見所東部に敷舞台を新設した<sup>(18)</sup>。

もう一点、名称変更についても触れておこう。大正十三年、亮太郎は門下の加藤貞藏を後継者とし、養子に迎える。しかし、貞三に大西姓を名乗らせることを大西家当主に許されず<sup>(19)</sup>、亮太郎自身も本来の姓に復することを決めた。大正十三年三月二十七日、貞三と亮太郎の長女芳子は小西新右衛門夫妻媒酌で結婚、二十九日に同披露宴（於大阪ホテル）、参加者三百人余。その席で亮太郎が改姓を発表した<sup>(20)</sup>。雑誌『大観世』五月号には、四月付けで「改姓披露」告知が掲載された。



披露能は、九月に入ってから二十・二十一日に大阪能楽殿において、二十三日は湊川能楽堂で開催した。

大西亮太郎氏が手塚家改姓及び貞一（\*ママ）氏同家養子披露を兼ね、観世、宝生、金剛、喜多各宗家援助の下に、来る二十、二十一日両日大阪能楽殿、二十三日神戸湊川能楽堂にて午前九時より開催。（大阪朝日新聞、九月十六日夕刊）

「観世、宝生、金剛、喜多各宗家援助の下に」とあるように、流派を超えたつながりを持ち、各方面から協力を得ることができるのが亮太郎の強みでもあった。

『大観世』に掲載された予告番組には、「湊川能楽堂」となっている。以後、神戸湊川の「大西能楽堂」は「湊川能楽堂」と改称することとなった。

（続）

(註)

(1) 上田隆一・照也の功績に関しては、畔柳盈雄・坂田昭二編『点を線にしたい…私本・上田照也の歳月』(上田英子、一九九〇年)に詳しい。

(2) 手塚稔子氏蔵の資料は、二〇一三年三月三十日に開催された能楽学会関西例会・第二〇回能楽フォーラムに際し、基調報告等で使用させていただいたものである。この時の資料は、後日、そのほかの資料と併せて古典芸能研究センターに寄贈された。詳しい全容は次号で紹介予定。

(3) 「手塚亮太郎」を立項する以下の辞典類参照。

- ・昭和前期音楽家総覧『現代音楽大観』(原本初版は一九二七年。一九二九年増補版・林淑姫編集・解題、ゆまに書房、二〇〇八年)
- ・西野春雄・波田昶編『能・狂言事典』平凡社、一九九六年(新訂増補版)
- ・倉田喜弘・藤波隆之編『日本芸能人名事典』三省堂、一九九五年

- ・森西真弓編『上方芸能事典』岩波書店、二〇〇八年
- ・小林責ほか編『能楽大事典』筑摩書房、二〇一二年

その他に、権藤芳一「能楽史の人びと」(月刊「能」三四九号、京都観世会館、昭和六十二年六月)、『大観世』大正十二年五月号「画伝 大西亮太郎」参照。

(4) 亮太郎筆の日記風雑記。大阪能楽殿が落成した大正八年の一月一日に起筆し同九年までの出来事を記す部分をベース

とし、合間に回想や備忘録的雑記などを挟む。中央の題簽に「大正八年記事」と記す。袋綴、二八・三×一九・二センチ、全三〇丁。

(5) 亮太郎筆。自身の勤めた習物の演能に関する覚え。はじめのほうは曲ごとに整理しようとしたようだが、途中からはおおむね年代順に記されている。共表紙・仮綴。表紙中央に「習事勤メ扣」、右下に「尚忠(花押)」と記す。横本(二四・二×二〇・二センチ)、全十八丁(墨付十五丁)。

(6) 正確には一時帰阪し、明治二十年三月五日に「公雪二十一才ニテ再上京」(『大正八年記事』)している。

「公雪」は亮太郎の自称。表章氏によると「同年(引用者注、改姓した大正十三年)九月頃の謡会では「公雪」と称している。改姓披露能は催したが、雪号披露能は催しておらず、能番組では最後まで手塚亮太郎だったから、宗家から許された雪号ではなく、自称したらしい。同年に大槻文雪が雪号を称したのに触発されて自称の由、仄聞している。昭和初年の二十四世左近宛書状にも「公雪」「公雪斎」と署名しており、宗家も事後承諾した雪号のようである。」(『IV 観世流の家と人』②観世流「雪」号考、『観世流史参究』檜書店・二〇〇八年)とのことだが、実際にはそれより早く、『大正八年記事』では大正八年正月の時点で確認できる(ただし、『習事勤メ扣』の記録では大正十年九月十八日に大阪能楽殿で演じた「井筒」が初出で、以後はすべて「公雪」。おそらくは「大阪能楽殿主」となった時点から使い始めたのではなからうか。

(7) 亮太郎と大阪の財界人との関わりについては、宮本又次『大

阪経済人と文化』(実教出版、一九八三年)に詳しい。当時、大阪の料亭「なだ万」は財界巨頭の社交クラブのようになっており、「大西亮太郎は常々ここに入入りし、それらの人々と親交を結び、ついに伊丹の小西新右衛門(白雪酒造)や久原房之助(鉱山所有、のち日立製作所)らの援助を受けるようになった」という。住友家との関係は、十二世住友吉左右衛門友親が、謡を大西閑雪に習ってきたことに始まる。亮太郎は自身は十三世吉左右衛門友純(号は春翠)との関わりが深く、後に大阪能楽殿のために土地を提供されることになる。徳大寺家から養子に入った春翠は、能も舞い、大正に期にはしばしば謡会も催している。住友関係者の田辺貞吉・田艇吉・浜崎定吉・川田順などのほか、伊藤忠兵衛(伊藤忠商事)、野村徳七(野村證券)、殿村平兵衛門(江戸期から続く大両替商)、弘世助太郎(日本生命)、楠本善吉(灘万)などが亮太郎の支援者であった。

(8) 明治六年六月二日、父の善蔵が歿し、手塚姓を継いだ。〔大正八年記事〕

(9) 家元の観世元滋からの大正十三年三月二六日付けの書状と、その間の事情を伝える書状各種を含めて、亮太郎自身が昭和四年五月に装巻し「復姓歴史巻」と名付けている。(手塚稔子氏蔵) また、職分の門弟には、各々に通達をしたことが、門弟の一人であった米田晴雲宛の書付から確認できる(古典芸能研究センター伊藤正義文庫蔵、米田晴雲関係能楽資料)。

(10) 六甲生「神戸謡能界変遷史」(趣味と名士編集部編纂『国

粹 謡曲及能楽』(現代芸術名家大鑑刊行会、大正六年)

(11) 神社の移築は三菱が和田岬にドックを作るため、明治二十六年三菱造船所の建設計画が発せられ、明治三十二年十月三十日に遷座祭が行われた。明治三十四年十二月移転により神域の造成完了、明治三十五年五月に現在の場所に移転、その折に、社務所、神饌所、能舞台は新しく建てられた。和田宮神社の舞台に関しては、小泉康夫「神戸の能楽のあゆみ」(『歴史と神戸』七号、一九六三年七月、神戸史学会)、雑誌『神戸史談』二三五号(特集・和田宮とその周辺)(一九七四年、神戸史談会)参照。

(12) 『習事勤メ扣』によると、明治三十三年五月二十五日、「於兵庫和田神社／舞台披」ワキは中村弥三郎、ワキツレ榮保助・中村侯一、間は茂山忠三郎、鐘引・後見は片山九郎三郎と野間亀之助が勤めている。

(13) 引用は、神田三郎「神田兵右衛門胤保翁を偲んで」(『神戸史談』二五一号、一九八二年)による。同論文では「兵右衛門の没する昭和十年まで」とするが、兵右衛門は大正十年に没しているので昭和十年没の慶太郎か。実際にはもう少し後まで続いたようで、『神戸謡曲界』五十二号(昭和十三年一月刊)に「手塚家のお面掛」と題した記事が掲載されている。

「恒例手塚家のお面掛けの儀は今年も正月四日厳肅にとり行はれた。…(中略)…このお面掛けと称するものは、手塚家の先代亮太郎翁によつて実に明治三十四年正月に始められ、今年に至るまでに正に三十八年間連続として行は

れたものである。殊に十年許り以前同翁が秘蔵の翁面、名人日光の打った白式尉を東京の中村直彦氏に囑して模刻せしむ諸社に奉納してからは一層意義深さを加へた。」

この記事は、「時局柄愈々意義深い」ものとして紹介されている時局色の濃いものだが、当年の様子を写真で掲げ、「手塚家お面掛けは従来常に手塚当主が自ら奉仕して来たが本年は健康上の都合で当地手塚門の木下一三氏が代参した。：翁の門下代勤は今年が最初である。」と、当主の貞三が欠勤した旨を添えている。

なお、『大正八年記事』には、大正八年正月四日の「神戸宮巡り 翁 御面掛ケ」の詳細が絵入りで記されている。詳しくは稿を改めるが、この年の参加者「定員五人」は「神田慶太郎 福喜仁 改正辰三 加藤貞蔵 公雪」。亮太郎は前日から神戸入りし、参加者は「湊川舞台工午前七時二集」まり、和田宮神社へと移動している。

(14) この舞台は、明治期には演能に使われることもあったものの、大正元年の湊川能楽堂の設立後は、演能に使われることはなくなつたらしい。写真は現存しないが、戦前の神社境内大観図からわずかにその様子をうかがうことができる。昭和十六年に当地を訪れた、明石在住の能研究家横山柚人は、そのさびれた様子を「外部の三面は羽目板にて全て覆ひ鎖され：今は物置の倉庫に利用」(『樵日記』三八四)『能楽世界』六四〇号)と記している。その後、昭和二十年三月の神戸大空襲によつて神社も舞台も焼失した。戦後、昭和三十二年に本殿等が復興するも、能舞台が再建されることはな

った。(ちなみに、復興の折に境内の建物の配置が変えられ、戦前に社務所があった場所が現在の本殿に相当し、能舞台は現在の稲荷社や巳塚のあたりに位置していたという。)

(15) 同居していた内弟子の加藤貞蔵(貞三の本名)宛の、大正四年八月廿日消印の葉書が現存する(手塚稔子氏蔵)。宛先は「大坂東区博労町一丁目六〇〇〇大西亮太郎内／貞蔵どの」、差出人欄の住所氏名印の「大西亮太郎」の下には「宅」と加筆。「神戸謡曲界」の記事による。詳細は後稿で述べるが、彼は、亮太郎没後、大阪の上野義三郎が家族とともに移住してくるのに伴つて転出する。

(17) 『大観世』大正十二年五月号「画伝 大西亮太郎」

(18) 『神戸謡曲界』五号(大正十三年十一月十五日刊)の記事「謡曲会場としての湊川能楽堂の敷舞台」による。これは女性の使用も自由だった。

(19) この間の事情は、大西信久『初舞台七十年』(大西松諷社、一九七九年)に詳しい。

(20) 『大観世』大正十三年四月号。結婚報告は同誌の同年五月号に掲載されている。貞三は、結婚前に亮太郎夫人の実家を相続、「井田貞三」を名乗っていた。

(附記) 資料の閲覧・掲載をご快諾いただきました大阪歴史博物館および手塚稔子氏に感謝いたします。